



発行所  
山口県小学校長会  
代表者 宇田川浩樹  
校長会事務局  
山口市大手町2-18  
☎ 083-925-2919  
FAX 083-925-6776  
印刷所  
大村印刷株式会社

## つながり合い、 答えのない問いに立ち向かう



山口県小学校長会 会長 宇田川 浩 樹

### 一 はじめに

本年度、山口県小学校長会の会長を務めさせていただくことになりました。山口県の小学校教育発展のため、微力ではありますが、会員の皆様のご支援ご協力をいただきながら、全力でその職責を果たす所存でございます。

さて、新型コロナウイルス感染症の影響により、ここ二年余り、学校の様々な教育活動は見直さざるを得ない状況になりました。本会の春季及び秋季教育研究大会も、皆様にお集まりいただいていたの開催を見送らざるを得ない状況でした。

そのような状況下においても、各学校は、教育目標の実現や児童に身に付けさせたい資質・能力の育成に向け、保護者や地域、あるいは医療関係者等様々な声を傾けながら、一つ一つ取組を進めてきました。そのご努力ご尽力に改めて敬意を表したいと思えます。

手教職員に対する人材育成等、すぐに思いつくだけでも数多くあり、どれも簡単な課題ではありません。だからこそ、これらの課題を会員同士が率直に出し合い、これらの課題に向かう知見や意欲を高めることが必要だと考えます。

本年度の本会の活動方針に、次のような文言があります。

このような中で、主体性をもって生きていくためには、予測困難な状況に対応する力をつけるという発想から、変化の中で自ら新たな価値を創り出す力をつけるという発想の転換が必要である。さらに、答えのない問いに立ち向かい、多様な立場の者と協働しながら最適解や納得解を生み出す力が求められている。

様々な課題や問題に対し、「どのように対応するのがよいのだろうか」と正解を求めがちになりますが、「多くの方がより納得するには？」というように、納得解を生み出していくという考え方は、現在の学校を巡る様々な課題に立ち向かうときに、大切な考え方だと思っています。最適解や納得解を生み出す多くの知恵や経験をもっていらっしゃる校長が集うことで、困難な時代を乗り越えていくことができると考えています。

また、今年度クローズアップされてきた課題にいわゆる「教員不足」があります。各都道府県の校長会長が参集

した小学校長会長連絡協議会においても、このことが話題になりました。県によって多少の差はあるものの、全国の多くの学校が、教員不足に直面しているという印象を受けました。そして、根本的な解決策はないものの、それぞれ改善に向けた取組を模索していると感じました。

本会としまして、このような危機的状況の改善に向け、知恵を絞る必要性を痛感しているところです。

### 三 各支部の研修活動を大切に

本会の活動は、活動方針や各専門部からの提案、事業計画に沿って進めてまいります。その他に全国連合小学校長会に関する活動も様々なものがあります。これらの活動の推進に当たっては、校長先生方のご理解と御協力がなると一歩も前に進みません。どうぞよろしく願います。

また、このような全体的な動きも大切ではありますが、最も大切なのは、校長先生同士がつながり合い、支え合える支部ごとの活動です。地元の講師をお招きしたり、教育委員会と緊密に連携したり、各校の取組を紹介し合ったりする等、各支部ごとに工夫した取組を進めておられますが、その充実こそが本会の要であります。

校長会の活動が、校長先生方の支えとなり、そのことが山口県の子どもの健全な成長につながることを期待しています。皆様の力を結集し、進み続けてまいりましょう。



# 令和 4 年度の 研 究 紹 介

## < 研究主題・副主題 >

自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る  
日本人の育成を目指す小学校教育の推進  
～高い志をもって 他者と協働し 新たな価値を生み出す  
子どもを育てる開かれた学校経営の展開～

## < 校長会関連研究大会 >

- ◆ 第74回山口県総会並びに春季教育研究大会  
5月10日(火) 山口県健康づくりセンター
- ◆ 第74回山口県小学校長会秋季教育研究大会岩国・和木大会  
10月28日(金) 岩国市周東文化会館 (パストラルホール) 他
- ◆ 第74回全国連合小学校長会研究協議会島根大会  
(兼：第69回中国地区小学校長会教育研究大会)  
10月14日(金) 島根県松江市 東京都  
(新型コロナウイルス感染予防のため2か所からオンライン等で開催)

### 柳井支部【豊かな人間性】

豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント  
 学校・家庭・地域が一体となった心豊かな人づくり・まちづくりの推進  
 本支部では、学校を核とし、学校・家庭・地域が一体となった人づくり・まちづくりに取り組んでいる。校長は、道徳教育や人権教育など心の教育の充実を図るとともに、学校運営協議会や学校応援団の機能を活用し、連携・協働体制の強化を図り、カリキュラム・マネジメントを充実させたい。学校・家庭・地域の連携・協働の推進及び計画的・継続的な実践の質的向上に取り組むための校長の役割等を究明していきたい。

### 大島支部【健やかな体】

健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント  
 家庭や地域と連携した、ヘルスプロモーションの活性化  
 健やかな体を育むことを「ヘルスプロモーション」の理念に基づいて、生涯にわたって健康で安全な生活を実現すること」とらえて研究を進めている。その達成には、学校だけでなく、保護者や地域との連携が不可欠である。

本支部では、多くのスポーツイベントが開催されるなど、地域の健康意識が高い。このような地域の特徴を生かした持続可能な取組に向けたカリキュラム・マネジメントについて究明することとした。

### 熊毛支部【学校評価・改善】

学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善  
 本支部では、組織的な評価・改善を行い、学校の教育力向上を図るため二つの取組に焦点を当て研究を進めている。一つ目は、知・徳・体などの校内プロジェクトを活用して教職員、保護者、地域の三者で行う協働的な取組。

二つ目は、小・中学校で、九年間の学びや育ちを共通理解し、相互の実践を評価する小中連携の取組。  
 この二つの取組が、実効性のある評価・改善となっているのかをこれから検証していきたい。

### 下松支部【リーダー育成】

これからの学校を担うリーダーの育成  
 活力ある学校づくりに向けたリーダーの育成と校長の役割  
 組織の要となり教職員を牽引していくミドルリーダーとそれを総括し適切な指導が行える管理職は必要不可欠であり、とりわけ教員の世代交代が進む昨今では、このような人材の育成は喫緊の課題である。

このため本支部では、活力ある校内組織体制の工夫、教職員評価の活用、地域や関係機関との連携等の取組を通じて、リーダーを育成するために校長が果たすべき役割と指導性について研究を進めている。

### 光支部【組織・運営】

学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと運営  
 「連携と協働で育む」小中一貫教育を推進する組織づくりとその運営  
 を支援する校長の役割について  
 本支部では「やまぐち型地域連携教育」の充実と「十五歳の子ども像」を共有・協働する小中一貫教育の推進に向け、副題の視点で研究を進めてきた。具体的には、①地域協育ネットの活用 ②小中一貫・地域連携協働カリキ

ユラムの具現化 ③小中合同研修の教職員の主体化の三点について、協働的な組織づくりと活性化のための校長の役割が研究の柱となる。今年是全国大会において発表予定であるので、参考としていただければ幸いです。



周南支部【危機対応】

学校と子どもを取り巻く危機への対応

子どもの生命・安全を守る適切な対応と体制づくり

近年、日本各地で、甚大な被害をもたらす自然災害や子どもたちが巻き込まれる事件・事故が多発している。新型コロナウイルス感染症に係る対応についても、これまでの危機管理の想定を超える状況となっている。本支部で

山口支部【経営ビジョン】

「先見的で創意あふれる学校経営ビジョン」の策定と周知

持続可能な仕組みづくりを通して

本支部では、学校経営ビジョンを『中長期的・短期的な目標とそれを具現化する戦略』と定義し、「小中連携、保護者・地域連携の活性化」の視点から策定と周知に向けた研究を進めている。策定段階では、「多くの人が参画する」

防府支部【研究・研修】

学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

学校の教育力向上には「チームとしての学校」を強く意識した研究・研修体制の構築が求められる。本支部では各学校において『核となる価値(自校の強み)』を生かした研究・研修のマネジメントに校長がリーダー

宇部支部【知性・創造性】

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

本支部では、急激に変化する社会に対応した創意ある教育課程の具体的な構築を進めるために、校長として ICT を活用した学校運営について研究している。特に ○学力保障・個別最適な学び

山陽小野田支部【社会との連携・協働】

家庭・地域社会等との連携・協働と学校間連携の推進

人づくりと地域づくりの好循環をめざす連携・協働の在り方

本市では「特色ある学校教育」の推進のために、六つの柱(一人一台端末の活用)「地域力・学校力・家庭力向上プロジェクト」「山口東京理科大学との連携」「キャリア教育の推進」「ふさとつながる子どもの育成」「市

美祢支部【学校安全】

地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進

Mine の特色である全市小中一貫教育校としての取組

本支部では、美祢市の特色である小中一貫教育校としての具体的な取組を進める中で、家庭や地域、関係機関、専門家等との連携を図りながら、防災教育・安全教育と教職員の研修充実に向けた取組を行っている。

下関支部【社会形成能力】

社会形成能力を育む教育の推進

地域の資源を活用しながら、キャリア教育の視点を取り入れたカリキュラム・マネジメントをよりよく推進するために、校長が果たすべき役割やあるべき姿とは何か子どもたちの社会性をよりよく育むためには、キャリア教育を基軸とした地域に開かれた教育課程を通して教育の質の向上を図ることが肝要である。本支部では、全四十二校の特色ある取組や「学校・地域連携カリキュラム」に見

萩・阿武支部【自立と共生】

自立し、共に生きる力を育む教育の推進

自立と共生につながる資質・能力の育成と校長の役割

自立と共生について研究を進めるに当たり、学習指導要領前文にある「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化

# 取組紹介

## 構想における の活用」

小さな取組から大きな一歩

柳井市立伊陸小学校長

神田 芳伸

昨年度から始まったオンライン授業では、準備の段階から不安がいっぱいで、途中にもトラブルが多発し、相手の学校とやっとながら無事終了することでも満足していた。あれから一年。私たち教職員も「習うより慣れる」の精神で、機器に堪能な先生にのみ頼るのではなく、まずは全員が直接操作してみることにした。職員会議や終礼の後、十五分でもいいからミニ研修会を実施し回数を重ねた。最初の内は、アプリによってできることやできないことが微妙に違い戸惑いを感じていた。また、ペーパーレスで職員会議を進め、共有フォルダ内にある文書を素早く探し出す作業をみんなで行った。

今、子どもたちの姿を見ると、全体画面では相手の話をしっかりと聞き、自分の考えと照らし合わせながら、個人画面に素早く切り替えて自分の意見を

述べている。子どもたちの順応性にとっても驚いている。急速に変化する社会に對して、私たち教職員も必死に追いつこうとする姿勢とともに、回数を重ねながらゆつくりと慣れていくことも大切だと感じた一年であった。

地域とともにある、プログラミング教育の試行

周防大島町立沖浦小学校長

平原 俊一

コミスクを進める本県の教育に付度気味の題であるが、やや後付けの実践紹介となることにご容赦を。本町においては、GIGAスクール構想以前より本町の教育施策の下に、一人一台端末の導入が進み当初低学年時から学習アプリによる、計算・漢字の習熟練習や、生活科等の授業において、撮影した画像を電子黒板に映し出し発表する教育活動を通して、端末が学校生活をよりよくする道具となるよう、教師の工夫による実践が進められていた、その土台に、令和三年度「プログラミング教育推進事業研究協力校」の県指定を受け、その授業づくりにおいて、本校の教職員は、「なぜ沖浦小学校でプログラミングを進めるのか。」と問い続けていた。その解が「地域住民が困っていることをロボットで解決しよう。」という主眼の設定であった。「買い物して欲しい。」「夜道が暗い。」「ミカンの収穫が大変。」「ミカンの選別をして欲しい。」との要望にロボットを使って主体的に地域住民の要望に応えながらプログラミングをする児童の姿を目の当たりにして、残りの人生をこ

の沖浦で送るこの老体は、安堵と感動を覚えた。

「教具」から「学習具」へ

周南市立福川南小学校長

佐野 英之

コロナ禍で「GIGAスクール構想」が一気に実現し、児童一人が一台の端末を手にするようになった。

本校でも、導入された端末をどのように活用し、どうすれば豊かな学びへとつなげていくことができるかを日々問い続けている。

その中でICT端末は、授業における教師の「教具」ではなく、児童の学びのための「学習具」として活用するという点を全教職員で共通理解し、授業改善に取り組んでいる。

とは言うものの、「学習具」としての端末活用が常にできているわけではなく、校内研修や情報交換等による教師自身の資質向上と端末を毎日持ち帰ることによる児童の活用力向上を目指し、個別最適な学びと協同的な学びの実現に向けて歩んでいる最中である。

教師の「教具」としての活用は常となってきた最近、ICTに詳しい教員と若手教員が、ベテラン教員を巻き込みながら、児童の「学習具」としての効果的な使用について話す声が職員室から聞こえてくるようになった。ICT端末が鉛筆やノートと同様の「学習具」となる日は案外近いかもしれない。

タブレット端末を使いこなせる児童・教職員を目指して

下松市立豊井小学校長

久保田 智子

令和四年一月に、全ての児童と教職員に一人一台タブレット端末の環境を整備された。本校では、小規模校であることを生かし、令和二年度よりタブレット端末を活用した授業に取り組んできた。その成果もあり、今では日常的に活用されるようになっていく。

五年生社会科、調べた食材の産地を端末上の白地図に書き込み共有する。

気付きや意見を話し合い、地方の特色ある食料生産や課題に気付くことができる。四年生国語科、初め・中・終わりの構成、問いと答えを、端末上に配付された構造図に付箋で書き込む。一目で構成をつかむことができる。また、これは児童が文章を書く時にも活用することができる。中学年道徳科、意見を色分けし、変化したら付箋の色を変える。このことで互いの立場が視覚化される。六年生は総合的な学習の時間のパワーポイントを共同制作。ライオンズライブラリーでは、児童は自分の進度に合わせて学習を進める。学習の進度が植物の生長に現され、意欲をかき立てられる。そして、遅ればせながら私も、グーグルクラスルームで、資料を共有し会議を開催する予定である。

タブレットを活用したプログラミング学習

光市立岩田小学校長

磯部 祥生

本校は、昨年度「県指定・プログラミング教育推進事業研究協力校」として、「論理的思考の育成」に取り組んだ。



# 各校の 今回のテーマ 「GIGAスクール 一人一台端末

研究の二視点に沿い紹介する。

一「教科等の学習におけるプログラミング的思考を促す場の設定」

六年生では、総合的な学習の時間において「お掃除ロボットを開発しよう」と、mBotを活用。「そうじ日本一」を掲げる本校の特色でもある「三拍子ぶき」と名付けた伝統のぞうきんがけの動きをロボットで再現しよう

とタブレット上にプログラムを構築。再現性と汎用性を求め、試行錯誤と再考・グループでの協議の上作り上げたプログラムは、六年生が卒業した後も、一年生に拭き方の手本を示し続けている。

二「専門家・専門機関との連携によるプログラミング教育の推進」

先ほどの六年生の学習は、徳山工業高等専門学校教員や学生にも技術面・指導面でサポートいただ



いている。さらに、クラブ活動に「microbit」でのプログラム講座を開講。タブレット持参で参加している。夏季休業中の親子講座等でも地域の専門家を招くなど、多彩な活用とつながり、裾野の拡大により成果を期している。

## 一人一台端末時代の新しい授業スタイルへの挑戦

宇部市立琴芝小学校長 藤本 満士

本校は平成三十年から大型提示装置や教師用タブレット端末等のICT環境の整備が整い、授業におけるICT活用やプログラミング教育について研究してきた。この度、一人一台端末を生かした児童の主體的な学びに向けて、次の二つのことに取り組んだ。

一つ目は、授業の振り返りの電子化である。振り返りの内容をクラウドに残していくことで、教師にとっては、全員の見取りが容易になる。また、児童は、自己の振り返りだけでなく、友達の振り返りを参照することで、自分の考えを広げることができる。二つ目は、中・高等学校で始まった探究的学習につながるように、授業の終盤にある「まとめ」と「振り返り」の後に次の課題設定と課題の解決方法を検討する時間を設けることである。この新しい授業スタイルが、次時の授業へ向かうための一人一台端末を活用した主体的な学びになると考え授業研究を進めた。

現在は更に、複線型の授業により個別最適な学習の授業を行い、児童の個々

の学びに沿った主体的な学習についての研究を進めているところである。

## タブレット端末の効果的な活用をめざして

山陽小野田市立小野田小学校長 田中 幸雄

タブレット端末の活用が始まってから、一年半近くが過ぎようとしている。今年度は、昨年度の反省から以下の取組を行っている。

### 【いつでも使える体制づくり】

これまでは、端末を使わないときは保管庫にしまっていたが、現在は、登校後すぐに保管庫から取り出して、机の横にかけてある専用ケースに入れ、いつでもどこでも使用できるよう準備をしている。

### 【活用場面の拡大】

普段の授業の中だけでなく、年二回の児童の学校評価アンケートを端末での回答にしたり、校外学習で写真撮影をしたり、家庭学習の音読やリコーダーの演奏を動画で撮影したりするなど様々な場面で使用することに努めている。

### 【校内研修での取組】

三年次の研修テーマに「ICTを授業に効果的に盛り込むこととおして」という副題を加えた。授業の中でどのように端末を活用するのかという課題に対しては、どの教員も意識が高く、授業だけではなく、研究授業後の協議においても端末を使用して、意見の共有、整理などを行い、教員自身も体験しながら活用方法を探っている。今後も引き続き、様々な取組を通して

て、児童が主体的に端末を活用できるように努めていきたい。

## 日常的な活用をめざして

美祢市立秋吉小学校長 吉田 睦美

子どもたちがICTの活用を通じて自らの資質・能力を高めていけるようにするには、端末やネット環境に日常的に触れる環境が必要になる。しかし端末の活用に苦手意識がある教職員が授業での使用に消極的であったり、使用場面を限定してしまったりすると、端末を活用して学びを広げていくことが困難になる。

そこで、先生方や子どもたちの端末活用を日常化させ、端末を教育に活用することの価値を先生方へ周知し、端末活用の技術も付けていこうと考えている。そのためには、全校一斉に取り組む活動を仕組んでいくことが有効である。

まず、取り組んだことが、授業支援ツール「ロイノート」を活用した「健康観察」である。それが終わると、「つばやきトーク」で、がんばりたいことや楽しみなことをカードに書いて提出する。全校児童五十六名の小規模校なので、全員のつばやきを見ることができる。これに先生方も参加している。この「つばやきトーク」で子どもたちはいろいろな機能を試している。今後どのように広がるか楽しみである。

支 部 情 報

熊 毛 支 部

熊毛郡三町教育の

アップグレードに向けて

熊毛支部は、田布施町（四校）・平生町（二校）・上関町（二校）の三町の学校から構成される。令和三年度からは上関町立祝島小学校が再開校し、八名の校長で活動している。

支部では、一年間で各小学校が一回主催する形で計八回の校長会研修会を開催し、学校運営における重要事項の審議や課題の解決を図り、また校長同士の親睦を深めている。

それぞれの学校で各一回開催することにより、各校の様子や雰囲気や様々な視点から実際に目にする点から、自校の学校運営の参考にできる点からもよい機会となっている。

直近では、特に ICT 機器の活用状況や新型コロナウイルスへの対応について情報交換することが多く、自校での対応のヒントになる取組や情報を得ることができ、学校運営の上で大変有意義な場となっている。

それぞれ同じ熊毛郡内には位置するが、自治体が異なるため、他支部に比べて各校の運営方法や実態などに差異が生じることが多い。子どもたちの多

様性を尊重することをよく言われるが、本支部も異なる町からの集まりであることよって、より多様な取組が見られ、それぞれの長所を取り入れながら各校長が学校運営を進めることで、より効果的に学校運営に資する会として研修を進めることができているように思う。

本年度、県校長会の研修分科会において、熊毛支部は「評価・改善」の研究担当となった。学校運営の組織的な評価・改善をどのように進めていくか、その中で校長がいかにリーダーシップを発揮するべきなのかをテーマに、各校の取組を持ち寄り、実践に生かせる内容とすべく研究を進めているところである。



（上関町立祝島小学校長 二宮 一晃）

地域とともにある学校を

めざして



平生町立佐賀小学校長

賀屋 陽子

「少し接しただけですが、佐賀の子は、周りの大人から大切に育てられている子どもだと分かりますね。」これは、遠方より来校された方の言葉である。本校は、後ろに大星山、前に瀬戸内海が望める、自然豊かで風光明媚な教育環境にある。毎日のように、様々な場面で家庭や地域の方々から温かい支援や協力を頂いており、子どもたちは、明るく素直で純朴である。

本校の特色ある活動として「いつてみよう 佐賀小学校！」がある。本年度は教職員のアイデアを大事にしなが、この活動をさらに充実させていくことが目標である。これまで学習してきたことを工夫して発表する、環境整製作業を一緒に作り、子どもたちがタブレットや英語を教える側になる等、いろいろ考えられる。そうした中で、恵まれた環境への感謝の念、人とながる喜びを再認識させ、伝える力を育てていきたい。地域のために自分ができることは何かを考え、地域の魅力を発信する活動へとつなげていけたらと思う。学校が家庭や地域の方々にとっても、憩いの場、集いの場、笑顔や元気を生む場となることを願っている。

学校、家庭、地域が連携・協働し、郷土を愛し、ともに未来を拓くたくましい「佐賀っ子」の育成に尽力したい。

新校長の声



光市立立塩田小学校長

吉田 哲朗

「おはようございます！」と、丘の上から元気な挨拶が響く。校門に立つ私の姿を見付け、何十mも先から声を届けてくれる自慢の塩田っ子たちである。

本校は、光市の北東部、県立自然公園石城山の北側に位置する全校児童十五名の小規模校である。校訓「済美」に相応しく、温かい地域や家庭に見守られ、心優しく誠実な子どもたちが育っている。このようなよさをさらに伸ばし、未来を切り拓いていくことのできる子どもたちを育てるために、これまでの立場とは違い、「校長」として何ができるか、日々自問自答を繰り返している。

校長室で一人、沈黙考する中で、これまで出会った多くの先輩方からの教えを思い出す。「実際に自分の目で見ること」「直接会って対話を重ねること」「よさに着目し内側から育てること」「心に響く『言葉』を選ぶこと」など、それらを振り処にしながら、決断し、実行している。

それでも悩むことはある。しかし、校長は一人だが独りではないとも感じている。ともに学校を創る教職員、支えてくださる保護者・地域の方々、同じ校長の立場で助言をくださる方々、様々なつながりを生かしながら、「きらきら輝く塩田っ子」「未来に羽ばたく大和っ子」を育てていく覚悟である。

（この文章は、新校長のインタビューに基づき、一部編集されています。）





「オネガイシマス。サイショハグー、ジャンケンポン！」  
川下小学校区には米軍

岩国基地がある。そのため、校区内には軍人・軍属とその家族や基地周辺で生活する外国人が居住しており、彼らの子どもは本校を就学先に選択できる。中には驚くほど日本語が堪能な児童もいるが、多くは十分とは言えない。

今年度の児童数四五八名のうち、日本語指導を受けている児童は二九名に及ぶ。日本語指導では、日本語指導担当教員と日本語指導支援員が日本語教室での「取り出し指導」や在籍学級への「入り込み指導」を行っている。

日本語教室では、当該児童の日本語の技能に応じて、ルールやマナー、日本語の基礎の他、教科の補習や困り事の相談も行う。当該児童一人あたりの「取り出し指導」は週二時間が精一杯で、生活の大半は在籍学級の担任や担当以外の教員が関わることになる。

本校の場合、当該児童の母語はほとんどが英語であるが、その英語であっても、在籍学級で他の児童と同等の学習を行わせようとすれば、教員には相当の負担になる。また、生徒指導上の問題が発生したときの指導や保護者への対応にもかなりの労力を要す。

近年、全国の小・中学校に在籍する日本語指導を必要とする児童生徒が急速に増加している。その背景には、人口減少に伴う労働力不足を補完するために、外国人の受入れが拡大されたこ

とが一因であると聞く。外国人児童生徒の在籍は、特定の地域に限ったことではなく、どの学校にも起こり得ることだと認識を改める必要がある。

受入れの課題として、本人には学校への適応や居場所の確保、学習のための言語能力の習得、自尊感情の高揚などがあり、学校全体では異文化理解や人権尊重などの指導、支援体制づくり、特別の教育課程の編成などが挙げられる。

行政には担当教員や支援員の確保や研修機会の提供など総合的な取組が考えられる。

多様性への対応は、外国人児童生徒の受入ればかりではなく、これからの教育において様々な場面ですます重要になるであろう。そのためには、学校、家庭、地域、そして行政の連携・協働を通して、

皆が互いの違いを認め、尊重し合い、助け合える学校を目指していく校長の更なるリーダーシップが求められる。

さて、今日も外国人児童に出会ったら、ゆつくりめの日本語で挨拶を交わし、じゃんけんを挑ませ、彼らの笑顔を楽しみに関係を深めていきたい。

### 多様性を受け入れる

岩国市立川下小学校長 河野達信

# 目 長 耳 飛

### ふるさとの歴史に学ぶ、人に学ぶ

周防大島町立森野小学校長 筈口由美子



「一度外へ出てみなければ、大島よさは分からないかもしれない」と地域の方は言う。

私は、二年前に母校である周防大島町立森野小学校に着任した。学校の北に広がる海の青いこと。かつて遠足で登った白木山も高山も健在である。

子どもの頃には気が付かなかったが、まさに地域の方の言葉どおり。ふるさとに帰ってきて、改めて考えてみることも多々ある。

一 **ハワイ移民の島**  
県の最東端に位置し、瀬戸内海に浮かぶ周防大島(屋代島)は、ハワイ州カウアイ島と姉妹島縁組を結んで六十年、絆を深めている。

ハワイとの縁は、今から約四十年さかのぼる。明治十八年に始まったハワイへの官約移民では、周防大島から十年間で三、九一三人の人が渡航し、その数は全体の約十三%にあたる。過酷なサトウキビ・プランテーションに従事し、その後、現地でホテルや新聞社、水産会社等、起業してハワイの発展に貢献した人も少なくないとのこと。

当時に思いを馳せると、自然災害や経済状況、社会情勢、あらゆる困難に屈せず、夢をもって未知の土地で生活を切り開いたくまじさ、フロンティア精神に満ちた先人の姿が目につく。

### 二 **みかんの島**

幼い頃、地域の田がいつの間にかみかん畑になっていて驚いたことがある。島の経済的自立を求めて、本格的にみかん栽培の計画が進められるようになったのは昭和三十五年頃。それまで作っていた米、桑、麦をやめて耕地は次々にみかん畑に代わっていく。以来、品種改良が重ねられ、「大島みかん」として受け継がれている。田畑転換するももには戻せない。しかし、限られた土地で暮らしを立てるために、大きく舵を切った先人は、進取の精神に満ちている。

以上、二つのことについて考えてみたが、大島大橋損傷事故での断水の際には、自宅の井戸から水を大きなタンクで運んでくださり、コロナ禍のマスク不足の時には、布で縫って子ども全員に行き渡るように準備してくださる方々。今も昔も「この状況をなんとかしなくては」「大切な人を守るために」という気持ちにあふれている。

周防大島の歴史を刻み、守り、育ててくださっている全ての方々への感謝とともに、先人の志や心意気を伝えつ、「ふるさとを愛する子ども」「未来を拓く子ども」を育てていきたい。

山陽小野田市出身で全日本かるた協会の永世クイーンとして、現在も地元の高校のかるた部の指導をされる傍ら、かるた教室などでかるたの魅力を広く発信されている久保久美子さんにお話を聞きました。これまでのかるとの関わり、かるたの魅力について貴重なお話を聞かせていただきました。

〜かるたとの出会い〜

私とかるたとの出会いは中学校一年生の時です。山陽小野田市（当時小野田市）の中学校に入学した私は、かるた部に入りたいという友達と一緒に部室を探しに行ったのがきっかけです。

私たちが見つけた部室は電気もない小さな部室でした。顧問の先生は野球部の顧問でもありましたが、本当に熱心に指導していただきました。部員の数は少なかったのですが、土日も休まず、毎日練習に励みました。日が暮れて、先生の家で練習したこともありましたが、練習内容は驚かれる方も多いですが筋トレやランニングが主な練習内容でした。お手付きをした数の二倍、グラウンドを走るといって、一見文化部のようですが、まさに体育会系の部活のような練習をしていました。

その後、地元の高校に進学しましたが、その当時、高校にかるた部はありませんでしたので、引き続き、中学校

のかると部の先生のもとで練習を続け、高校二年生の時、ついに東西対抗戦に勝利し、クイーンとなりました。当時最年少のクイーンでした。その後八年間、クイーンの座を守り続け、永世クイーンの称号を頂きました。

〜かるたの魅力〜

ここでいう「かるた」とは「小倉百人一首」のか

るた札を使う「競技かるた」のことです。

この人 この歩み  
ちはやふる  
我が町文化を世界へ

全日本かるた協会

永世クイーン 久保 久美子 さん



探訪シリーズ

取り札を取る。そんな集中力と反射運動で競う頭脳スポーツ、畳の上の格闘技としての大きな魅力があります。

一方で、百人一首はその名のとおり、百人百様の人生が一句一句に読み込ま

れています。今でも日常生活の中で、「この場面はあの句の場面なんだろうな」

と感じる時がよくあり、様々な生き方や心のもち方の勉強ができるものとしての大きな魅力もあります。

〜かるたから得たもの〜

今、かるたをしてきてよかったです。うことは、世界中の人と仲良くなれたということ。現在、かるたは日本だけでなく世界中に広がっています。韓国、タイ、アメリカ、フランス、ブラジルなど、多くの国に「かるた会」ができ、私も何度も訪問させていただきました。新型コロナウィルス感染症が拡大したここ数年間は活動が自粛され、とても寂しい日々を送っています。が、一日も早く以前のように我が町文化「かるた」を通して世界中の国々の人々と楽しく関わることができるように戻ってくることを心から望んでいます。

永世クイーンとしてかるたの道を究められた久保さんのお話を聞き、かるたの奥深さや魅力を強く感じる事ができました。厳しい勝負の世界でも人との出会いや絆を大切にされてきた久保さんの生き方に感動しました。

（山陽小野田市立赤崎小学校

校長 間恵 満貴

山陽小野田市立本山小学校

校長 長尾 誠治

本部だより

新型コロナウイルス感染症の第七波が大きく襲ってくる七月、今後の状況を予測することは困難であり、これまでの取組の事実を記し、校長会並びに校長先生方のコロナ禍でのご尽力に敬意を表したい。

小学校校長会では、本年度、第七十四回総会並びに春季教育研究大会を三年ぶりに参集しての開催とし、山口県健康づくりセンターで実施した。一堂に会するか、リモートで行うか、二つの案を進めながら最終的な決断をしたのである。秋の大会についても岩国・和木支部の方で複数案を検討しながら進めている。

このことは学校においても同様で、感染拡大防止の取組とともに、地域との連携・協働による日々の教育活動の推進に取り組んでいる。教育活動を進めるにあたり、実施の方向性を多方面から検討し、様々な状況に対応できるよう複数の案を用意し、子どもたちのよりよい成長に向けて決断を下してきている。

今後、感染症が、いつどのようになるかは分からないが、様々な状況の中で緊急かつ多様なことを求められる今だからこそ、我々校長は幅を広げ、柔軟な対応を行っていくことが、大切なのではないだろうか。小学校校長会としても幅を広げ、よりよい対応を行っていく覚悟である。